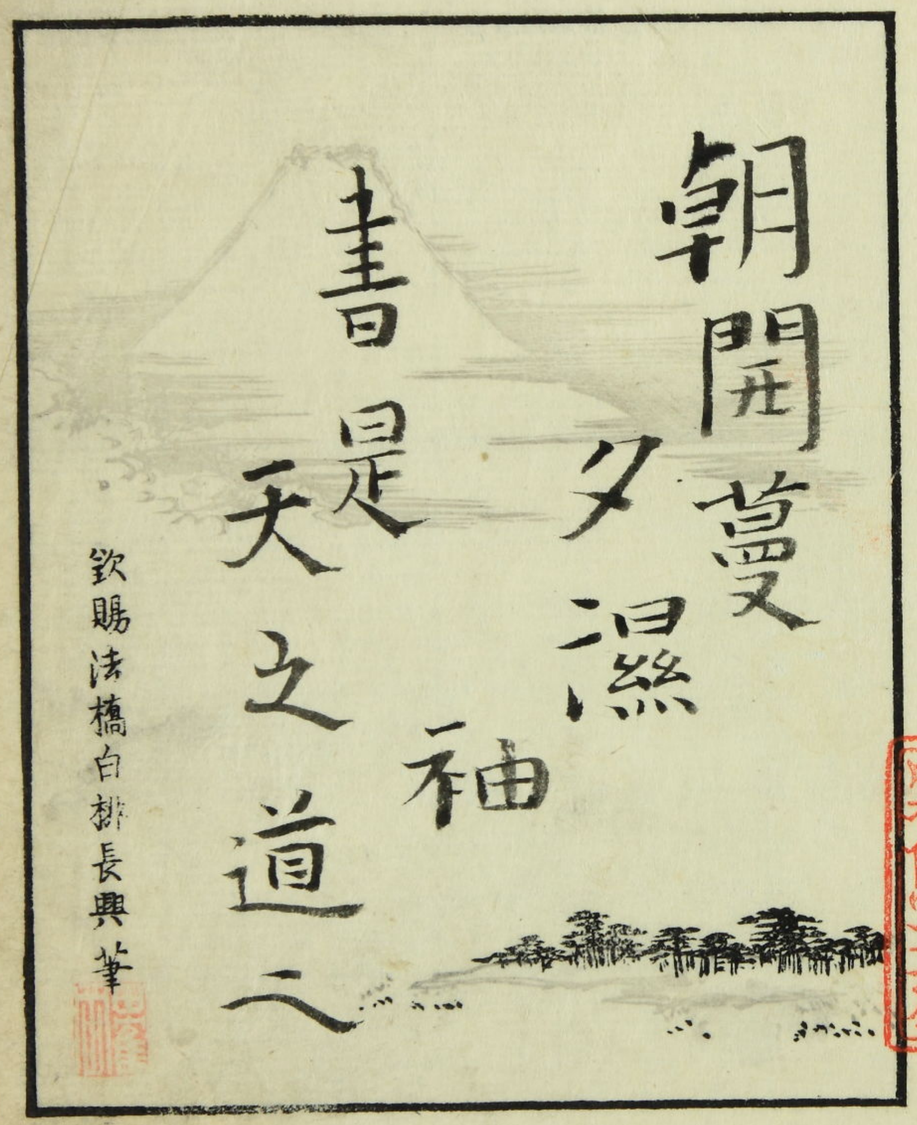
文政七申年
御奥村御渡

中村俊定文庫
文庫 18
969

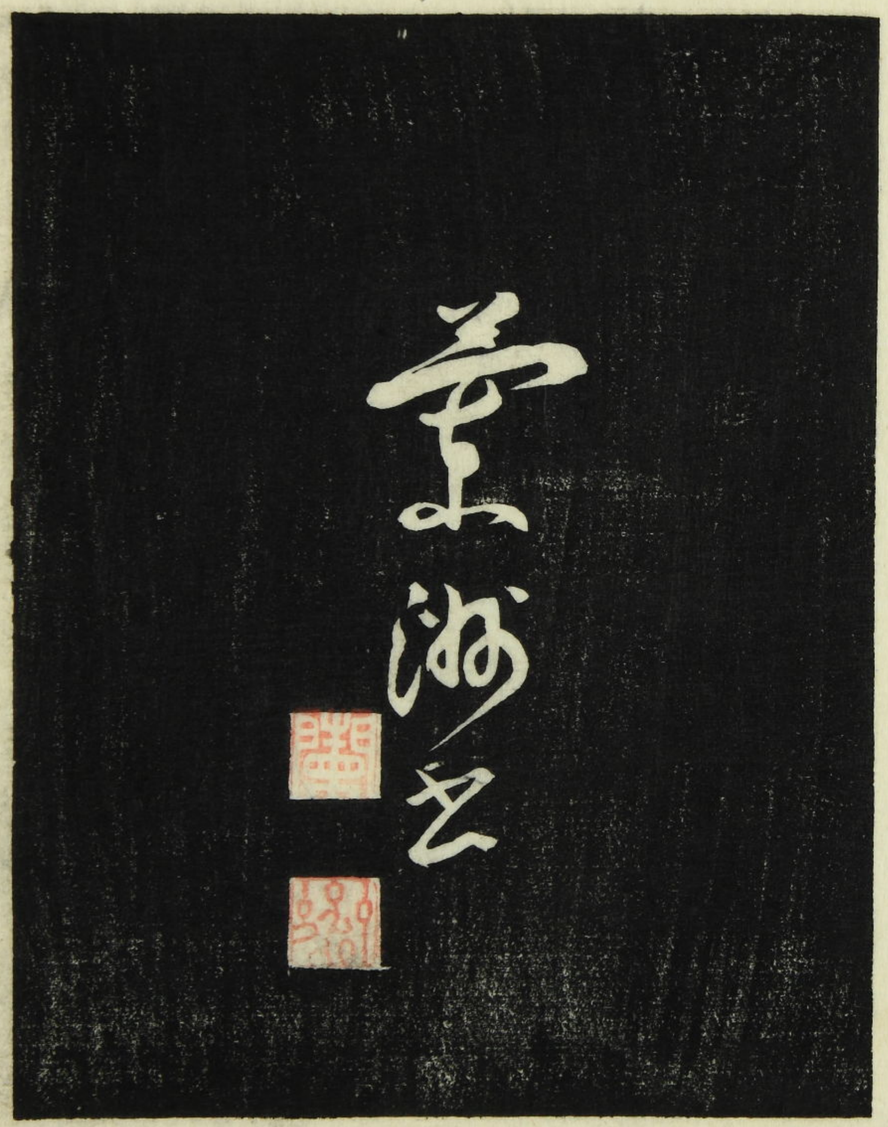
紫の富士

三計七ヒ

鳴弦館



中村俊定文庫


柔

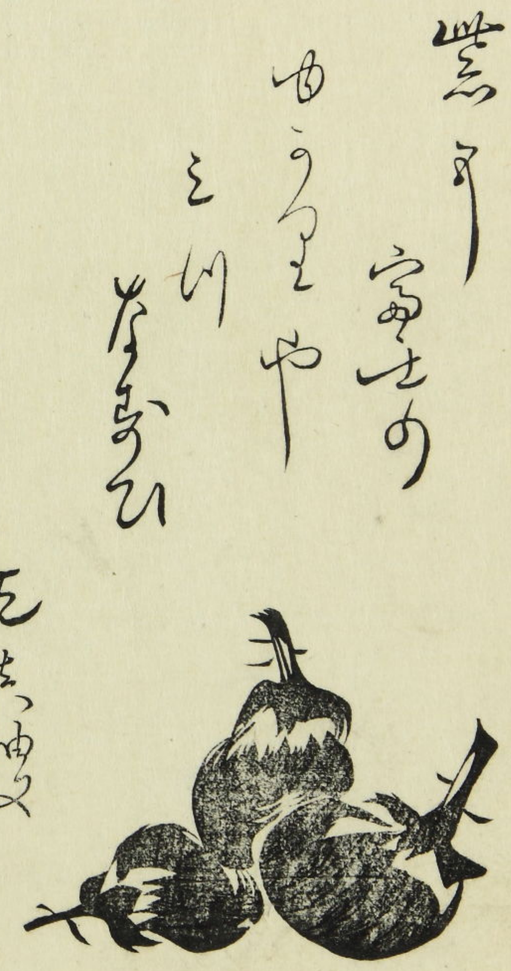
知の空乃雲もたちやきえみそらの雁おもて
出るてかるちちさる雲行法師を拾ひ捨し
蓑をきて見ぬ名所旧跡東路に越うる我
服ふていへと時まつ人ていとみき附ふすを分ふも
あくハ形るこひもあしを冨をこをふも
見るものかるを見て何もちまつようきめて乃後
欲ふるにふきこを軽ふ羅を和尚を蓮
あくうを頭ひ事此絵あつしに世をえこん

も芝蓑笠の三字成綿ゝ花の有かゝ伝
其こを乃等合を字ふかを被上人の富士ま
事あり北空を潤て切糸るを者あ糸ひ乃
雲息に暗を敢ふ者にひろ乎一姿我身
雨し身祝ゝ侍りける

見ぬ不二も駿河茅の
ゝうぬうま

経覚

身ゝて家ゝて形稽ゝてあゝちんゝゝ
備者の雲流を乎侍ゝ粧



房海の嘉祥福寿皆吉祥婦人
おしよせて作く〳〵祝言
少し雨いふ

うさぎ消言葉の和　雪芙蓉

七十三叟　再生斧

結へても摸る流揚の宴　五彩堂　吾立

ちらさまい抱き山ひいちの人　得一菴　雨鳥

一冨士ひろうよたかや涼見子　桂亭　清る雄

夏よりひく枕ゝ踏の夏　枕　吳綾斎　至席

浪華の春を流れたまふ
西と人はもうつ繁ちふ

蓑ゝ夏サア雨ちかや波人　浴泉盧　爲掌

第一夏ゝ咲　敷時の母からの風　梅之室　因桃

富士うつる茶碗とりたる翁可南　泉明

お和土の軍中箱記　柳ゆ　采洲

善を告る鶯ハ地へそいりにゆる　君竹

杜宇夏の長日　鳴て　百條

あらぬ世の坊主の根芽哉　雪鳴

清ちりと寒ひりかな　卧　梅の実　ち井

道をゆし茂る柳蔭　鯉丈

猶んてハ富士見えていとる清水ぶ　杜右

未廣て冥く扇や　夢合せ　岸松

えゝ朝のゝる物よせんと

山時の茂ありしも更し

茂涼し嵯峨法師を毎亀花　羅山

常夏のよもうゝ咲くや原とゝり　東稲

裡史の如し瑞茂よ土の西ゝを見る後

此僧動乱去ふ法して京刀の高根さたしれ

あゝくのゝ祢を彼ゝ者ゝ嵯ゝ武ふ易

ゝゝ之と丈未の者ゝ此を祝し侍ゝて

紙眠ゝ見ゝ見ゝ祖の牡丹ぶ　麦光

面影や弐の浦なる秋草　東車

涼しさいつれの名残なる　越連

名山の雲砂を洗ふ清水　仙興

廣うる影津玉造せ戦心　東翔

富士のかたりかるる不二清　五栗

爰涼　抱えて沼る富士の山　巨竹

さえ乃耳の振涼し　不二乃友

短冊を足る中知る中爰涼し　東素

洗秋

朝日より聲るる秋を牡丹の肌　南；

千代植ん富士の玉苗士さんく　砥平

數豈此　爰を極る扇　可吉　扇獅

思ひ乃ふ知の洗ふ清る心　志ゝ乃ら

一節ゝ富士ゝ赤ゝ乃ゝ年竹　如勇

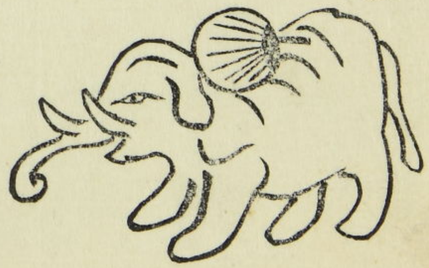
豊さ此　日乃ゝ　乃る吉田哉　寸獅

士乃る西ゝ人ゝ世の園の恵ゝ

伊見の里の乃ゝ系ゝ乃いゝん

此君の爰さを加る未素迄　雷翁

蜀妓あの一画



ゆ時する語りや　江口のさとびと

納涼床　其柳

涼しさやあたゝまるる蓑　始登

茅乃山又る魅や　地ちらはし　其道

さゝ船よと朝日よむふ牡丹ぶ　山笑

消え無名をお城ぬりをへぬ皐月不二　常盤坊

墨馬に涼よ砂見のさくら麻　廿根

あるき板を白水の伏見土　茅宋

柳風ふるる朝熊の煙うふ　二雪

美結ぶ中よ富士を清水影　胚州

士の地を新乙海のふ絲のふ墨くふ
あるる重耳一塊を絲一寸
法住り霸ふ

伊勢涼し不二ふ造化の土油工　馬宥

お土産る味面白お富士　寸理

一ふを玉地紙しと好地の祝ぶふ　周女

夕太中盛るまうらの雪の峰　青山

清き姿は風を扇の富士ぬろ　其之

又残しの麦堀出しまう氷室哉　里巽

栄ぬ為の蕎麦や富士まうら　花碧

ろ縁しかのと陰まうめ柳ず　至素

西ぬのお重箱よ一つ北嶺　志ま女

お鼠乃猫の影さよ伏見焼　芦良

昔見し人乃姿や夏の不二　花鶏

富士を見し都の高し夏木立　泉南　佛菴

雪まうへ山まうり不二清　誉田社　蓑風

まう鞠の志めり加減や夏柳　邪山　多人

見られいよくまうし夜のふ二　豊後府内　只笑

栗田萬屋の庭ろ都の富士見しを

裡叟主人の瑞雲ぬ

とりぬ日ぬ浮く

歳末の雪ぬ月ぬ

とろ見太のしし此　清幽盧　魚亮

春梅の朝ぬ

葛衣竹杖任風雲夢裡巨觀為汝分
笑殺銀造貓子蒸泥丸何出源將軍

香渺　上月信勝

名も高し駿河の山の雪の富士　隆巴
呉竹の如しさちの実栄哉　文坡
正しくと不二ル緑ひもの枕かみ　孤賀
これを雪毒田舎の富士の新涼し　孤鶴

如此涼し富士の山の男ぶり　泉齢
峰いつくみ川の志ぶき迫清多　如徹
風呂敷の包んで授け玉乃苗　竹亀
清水の雪の峰を見ん夕枕　喫里
日の向小菊や志ぶの朝の盃　雅雄
三國の一の象の中の雀鶯　曽翔
菊の花の薫りて富士の書尚　東俤
其影を筑世清れと法師　其日庵

土曜乃伊勢参詣世上乃
事ニ[illegible]ふるまひのこゝろ[illegible]
を人まを西行法師の土木偶分ひ
いゝ笑家嶋[illegible]後素[illegible]市を社也
ひ如[illegible]て代の人乃梵夏[illegible]
嗚呼[illegible]ゝ[illegible]可幸一時を[illegible]
去夢の[illegible]市を[illegible]

抱籠中　青鳥庵　山桃

素[illegible]する[illegible]市[illegible]

駿河井

短夜の蚊ゝ[illegible]乃玉を[illegible]　亀男

津一ゝ蚊乃友ゝ冨ゝ　かいて

蚊の[illegible]ゝ[illegible]涼ゝ[illegible]　[illegible]

四ゝ涼ゝ井ゝ[illegible]の清見浮　江北豊太　ひふ女

不二ゝ[illegible]人ゝ大ゝ[illegible]　正雀

七寶充満ゝ保の松風[illegible]　雪[illegible]

ゝ乃ゝゝ明石ゝ[illegible]ゝ夏の月　南妓　羽石

ゝゝ[illegible]北風[illegible]駿河町　裡同

三保清見ワきて其あの涼しさ　皇都普門院僧　民至

杖突乃のしさ笠ろん早松茸　南柿舎　朝見

まつ蚤も絶へて蚤の升かなるる　不欲

ぬるたまはまおろてあまつ搔の實　湖龍

おもろろも富士の幸之金銀茶　志里

我　般若の茶　ゆけ三保の立ま立　叙道

むさひし地あ鹿ろや綿の花　帆補

涼しさ立ちれよ柳　蕉　雪吐

蕎涼したのもあや土人取　孔樽

多ゆる種ゆ富ろ百合の花　女環

時を待ち蕎ゆ梦見ま　銀柳

暖ろ鳥ろ鳥の雀　大坂屋玉の井太史

太ちる影ゆ涼しさ柳ろ　仝　和國麦

かるる多風ゆ薫ゆおるまふこ　仝　和菊麦

遥かなる二のあをぬや夏　表濯

明あき夜も狩れし富士山　芦舗

菓子ばこさえぬ恵の影の風　芽函

宵やすこ二世夢も忘る絵の人　仙函

柿本人麻呂東路の道ゆ草葉を懐ふ
古曽部の今道八重の山乃きをゆえ赤貝筑
歌ふ人ゆ葉ゆ　行宴の夢不二見の俤を義
又後の世に逢可之箇之惟之貝ゆも非ぬ　埃世
あらば　きとゆ　所ゆ形ゆ世かとゆ
領点　しるる

讃州水茎岡

世を安ら翠山ゆ合歓木菓　青山

きくはゆや栄り軒ゆ彩ゆ幾ゆ代　耕竺

篠　延ゆ　ゆ　ゆ　

春雪の降りて富士の白き
雪天乃下卒士乃
[illegible]
[illegible]

是ぞ土産硯江戸見物　夏柳　蝸甲

あまつ月雪を短歌に　掬れ

初雪を清水の美濃の美濃の美蓉峰　弟山

美濃近江富士山の名所　雅竜

短夜の蓑の上の歌の友　素生

世の人は知てる浪華の名所　馬山

富士の名を見るの年世　八洲

名高き雪の上まで　秋鋤　哥木

蚊帳揚てよや有明の月　銀の猫　蕉雨

風うれし涼しさ告ん村まつり　松茶

仮の名惜しき人面の暮の月　遥雅

吸ものし梦の初雪　夕枕　山樹

面影迄蕎麦よもぎや苔清れ　雪言

雑事中侍道吸　富士の姿　女禁

黒い色てちと汲うくき清水　其夕

月よかこち和ら裾の傘　瑞白

印章代以自画賀梦想

大寶坊の旅路乃玉人形を拾ひ裾子
うらやみ肩を寄て実業家の富貴を
ゆるものしれ　和田ふ西行俗ゆ時の名を
左兵衛尉憲清姓は藤原朝臣（蜂谷）俵屋太
秀郷乃苗裔之こめうも的ゆ
ぬる　松茶　馬をあさ中に絶ゆ
軍士を不次のまゆの屋敷ゆの仮
ゆ中南山麓乃ゆ　ゆ　係も清見も
まくらの行御百姓道の柳ゆ下ふ着く

舟にあるとも紅ひゝく江口の君う
かりそめ乃情をつゝ普賢の象も律師
う餐乃味をそしらうこそ甘にゝ宴
まあらつふに風流を粧かゝねあんゝ副
し繰さけをも探るゝんゝおもひやりつも

家鶏をかゝし月貫も青あゝ

短夜の蛍ゝ袖をゝ
めゝうねをみゝき

てゝ地と一とゝ人ゝ
きゝゝ乃瀑面うな
鳥さゝ
蛙ゝゝ